

平成20年度大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会  
第1回森林生態系部会  
議事概要

◆日時 平成20年7月18日(金) 14:00~16:00

◆場所 奈良市 春日野荘 畝傍の間

◆出席者

<委員>

井上 龍一	奈良教育大学附属小学校 教諭
川瀬 浩	日本野鳥の会奈良支部 支部長
木佐貫博光	三重大学 准教授
佐久間大輔	大阪市立自然史博物館 学芸員
高田 研一	高田森林緑地研究所 所長(ご欠席)
野間 直彦	滋賀県立大学 講師(ご欠席)
日野 輝明	森林総合研究所関西支所 野生鳥獣類管理チーム長
日比 伸子	橿原市昆虫館 資料学芸係長
前田 喜四雄	奈良教育大学教育学部附属 自然環境教育センター 教授
松井 淳	奈良教育大学 教授
村上 興正	元京都大学 講師
横田 岳人	龍谷大学 准教授

(以上敬称略)

<関係機関> 林野庁近畿中国森林管理局  
計画部計画課 山口 輝文 課長  
箕面森林環境保全ふれあいセンター 上村邦雄 自然再生指導官  
奈良県くらし創造部景観・環境局  
自然環境課 松浦 寛二 主幹  
" 中川 康博 自然公園利用係長  
上北山村  
建設産業課 松島 克典 主幹  
吉野きたやま森林組合  
上北山支所 森岡 哲也 理事兼参事

<事務局>

近畿地方環境事務所	瀬川 俊郎 近畿地方環境事務所長
	田邊 仁 統括自然保護企画官

	高橋 勝志	野生生物課長
	松井 裕	自然再生企画官
	西野 雄一	野生生物課 移入生物専門官
	角 智則	自然保護官
吉野自然保護官事務所	瀬川 涼	自然保護官
(財) 自然環境研究センター	永津 雅人	第2研究部長
	荒木 良太	第1研究部長代理
(株) 環境総合テクノス	樋口 高志	環境部リーダー
	保延 香代	環境部リーダー

#### ◆議 事

1. 第1期森林生態系保全再生計画の評価について
2. 森林生態系保全再生計画の見直しに向けた論点整理について

#### ◆議事概要

○委員及び関係機関からの主な意見等

資料1 「森林保全再生計画における平成20年度事業の概要について」

- ・内容については了承。ただしどうしても必要な調査が出てきたら追加を検討願いたい。

資料2 「平成20年度大台ヶ原自然再生評価委員会開催スケジュール (案)」

- ・日程については特に意見なし。

(1) 第1期森林生態系保全再生計画の評価について

##### ① 植生に関する調査の評価について

- ・再生ポテンシャルが低い所は積極的に手を加え、高いところは柵をするだけで良いというのが1期目の基本的な考え方。この考えが正しかったのかの評価が必要。

- ・大台ヶ原を7つの植生タイプに区分したことの妥当性についても評価する。

植生タイプI (森林の更新ポテンシャルが非常に低い植生タイプ) の広がり把握することが重要である。このことが、戦略的な自然再生方針につながる。

- ・他の植生タイプは防鹿柵で囲うだけで森林が更新できると予想したが、この予想は正しかったのか? 次のステップを検討する必要があるのではないか。

- ・植生タイプ別の調査結果については、予想した結果が出ていると思うが、この実数値をどう見るのかといった検討が必要 (光条件など)。特に光条件面からの検討が必要。

ササ密度が大きく異なるのに実生数に差がない。この点についてなぜ異なるのか検討が必要。

##### ② 森林生態系保全再生計画実証実験の効果確認調査の評価について

- ・植生タイプI、IIの防鹿柵の効果について「ミヤコザサの被度桿高の増加も効果であ

り、その結果として実生後継樹の成長に影響を及ぼすという問題が生じているというのが正しい認識ではないか。

・実生の定着には関門が何カ所かあると思われるので、結果のみでなく、各関門の分析が必要。パッチディフェンスで実生が上伸するなら、林下の防鹿柵でも光さえあれば実生が伸びることが期待できる。

・ニホンジカの生息状況と植生保全対策や植生に関する調査を関連づけて検討する必要があるのではないか。

### ③ 野生動物に関する調査の評価方針について

・植生タイプⅠ～Ⅶだけではなく、溪畔林などの別の視点も必要。

・動物モニタリングについて、昆虫に関しては第1期の調査では、現況の把握ができたことが成果。個体数や種数は年変化が大きいので、経年変化を見るにはデータを蓄積する必要がある。

・モニタリングの調査時期を動物のグループごとに決める。対象とした動物の生活様式に合わせた調査が必要。

・まずは種のリストをきちんと整備する必要がある。引き続き資料を収集していくこととしたい。

## (2) 森林生態系保全再生計画の見直しに向けた論点整理について

・目標の中期・短期目標は変更が必要。

・実生の定着と後継樹の育成という目標の間に技術的なギャップがありこれを埋める必要がある。

・Ⅰ～Ⅶの分布についてササ分布のメッシュにのせて解析する必要がある。

シカのデータと植生のデータをメッシュの規模で関連させていく必要がある。ニホンジカの生息状況と植生保全対策や植生に関する調査を関連づけて検討する必要があるのではないか。

⇒ [事務局] 今年度詳細な林床調査を行っているところであり、ご指摘の解析は可能なのでご指摘の解析を行いたい。

・衰退の前線での対策にしろトウヒ苗木の移植にしる、生物多様性の保全の必要性を明確にして行ななければならないのではないか。

[文責：近畿地方環境事務所]